

2006（平成 18）年度 東京大学 入試問題 第 1 問 解答例

一 死者は、生物学的には存在しないが、生者に依然として作用を及ぼし、現在を規定するので、社会的には実在し続けるということ。

＊「社会的に実在する」という**必須要素**に加えて、帰結（解答述部）の論拠が、「生者に依然として作用を及ぼし、現在を規定しているから」である。**単なる並列や逆方向の説明は不可**である。

二 人間は、社会の存続に依存しつつ、自己の死後の未来社会にも生きていていると思われる人々のため、有益に働きかけるということ。

＊まず「**自分が死んだあともたぶん**生きている人々」の説明が間違っていれば失格であろう。「自分が死んだあとも」は、「行う」ではなく「生きている」を修飾する。そのうえで、「社会的な**相互**作用」を正しく説明できるかどうか。「自分（死者）」と「自分が死んだあともたぶん生きている人々（生者）」との間では、「相互作用」だの呼応だのはできるはずがない。「現在の自分と未来の人々と」の間では「相互」の作用はできないのである。とりわけ「まだ生まれてもいない人」には何もできないであろう。そうではなくて、「過去の先行者・未来の生者」いずれも「社会」を構成する存在なので、「先行者から現在のわれわれへ」と「現在のわれわれから後代の人々へ」が互恵性において「**パラレル**」なのであり、「現在の生者」と「社会（過去と未来）」との相互作用が可能なのである。

三 先行者の世界は、現成員との連続性が表現され、意識可能な形で絶えず覚醒されてこそ、真に社会を安定させ、強力にし得るから。

＊「表現され、意識可能な形にされ」＝「**象徴化**され」ることである。それが必要となる理由が問われているのである。たとえば、先行者（死者）は墓や位牌、またお盆の行事などで「**絶えず覚醒**され」ている。それはなぜなのか。

＊この設問の解答内容は、要するに「先行者（死者）の存続性、現在との連続性が強く意識へと喚起されることで、社会の安定・強化が図りうる」という、極めて「世俗的な」価値理念を意味している。後の「犠牲」というモチーフと同じく、死者の世界も来世観も、社会の統制維持のための文化的装置なのだという、宗教を機能面から考察した文章である。そして、この内容が設問五と直結している。

四 他者のための死の犠牲は、他者の生を尊重し、集団存続のために自らの生への執着を捨てるといふ勇氣と能力を意味するから。

＊他者のための死の犠牲は、普遍的に評価の対象となる。つまり、自分以外の若い社会メンバーのために身を引き、生を諦めることは、褒められるべきことだ（「犠牲」の価値モチーフ）という意味である。もし老いた者が生や権力に執着し、名利にしがみつくなれば、「集団の存続は危殆に瀕する」ので、どのような社会も、老人は従容として死を受容し「勇退」することが期待され、（ほとんどの社会では）評価されるのである。

＊ただし、これは近代以前の社会における「普遍性」であろう。現代ではこういう考え方は ageism であり、それゆえ筆者は「ここでは事の善し悪しは一切おいて」と断っているものと思われる。

五 社会で死者の存続が説かれ、宗教が来世観を有するのは、各々の基礎にある、先行者と現成員との連帯と他者のための死の犠牲という価値理念を象徴する必然性による。二つの価値理念は、死者と生者の共同体である社会の存続を図る点であい呼応するということ。(一二〇字)

＊「通底する（ないし対応する）」のは、当然ながら、「世俗的一般的価値理念」（伝統を守れ、など）と、「宗教的価値理念」（自己犠牲によって道を譲れ、など）との二者についてであるから、その通底する内容とは、「社会・集団の存続のために」であって、後者だけでしかない「死後への執着（「犠牲」の対義概念）を捨てること」などではない。受験生にとっては具体例も少なく、難解に思われるのも無理もないが……。

＊まず、「先行者の世界に関する表象」と「来世観」との並列・対称性（単純化すれば「過去と未来とに関する象徴」の並列）が正しく示されていない答案は、失格と言わざるを得ない。そういう答案が極端に多くなってしまった一因は、この文章自体の書かれ方にもあると考えられる。そして、それら各象徴の「基礎にある」「価値理念」（その一方は当然「犠牲」であるが、もう一方がつかみにくい。「世俗的価値理念」とは、たとえば伝統を守るべし、というようなことである）があり、さらにそれら価値理念どうしが「通底するないし対応する」（＝「あい呼応している」）のである。この論理構成（解答の構文）が誤りだと部分点は出せまい。本文の第5段落、とりわけ傍線ウとその直後の「他方、～」との並列がポイントである。過去の先行者である死者との継続性（伝統など）を尊重するのも、来世観を信じて将来世代のために身を引く自己犠牲を評価するのも、いずれにせよ根底においては、社会・集団の安定と強化を最優先目的とするところに帰着する。先述の通り、宗教を社会的文化的装置として機能面から捉える宗教観である。

六 a 沈殿（沈澱） b 巖然 c 要請 d 従容 e 克服